

「冒頭詩行」の存在性格

— 形式的研究の限界に関する一試論 —

小 栗 栖 等

Lutèce 第23号 1993年 抜刷

大阪市立大学フランス文学会

「冒頭詩行」の存在性格

— 形式的研究の限界に関する一試論 —

小 栗 栖 等

1. 序——問題提起——

1.-1. 「冒頭詩行」という概念の起源と展開

武勲詩を構成する行数不同の詩節 (laisse) の最初の詩行が、何らかの形式的特徴を帯びているということを最初に指摘したのはジャン・リシュネルであった。

「 [九つの] 武勲詩のすべてにおいて、極めて頻繁に、主人公の名、あるいは正しく主人公を指示している普通名詞が、詩節の第一番目の詩行に文章の主語として現れてくる [……]

叙事詩的倒置が詩節の冒頭に現れることもしばしばある。すなわち、叙事詩的倒置が歌い出しの価値 (valeur d'intonation) を有していることは確かなのである [……]

《属詞形容詞 + 動詞 être + 主語》という語順も、叙事詩的倒置と同様に、歌い出しの価値を持っている [……] (Rychner, pp. 71-72)

但し、彼自身は上の指摘を網羅的に裏付けなかった。第三のカテゴリーについて、「 [『ロランの歌』においては] 三つだけ、このタイプの詩行が詩節の内部に見出される (Rychner, p. 72)」と述べただけである。しかし、こうした「歌い出しの詩行 = 冒頭詩行」の存在は広く認められ、各種の主張の根拠ともされている。例えば、写本が赤の大文字で詩節交代を指示しないにも拘らず、モワニエはベディエに倣って、『ロランの歌』の第125 詩節の途上に詩節交代を認め、これを第124 詩節と第126 詩節に分割する際、以下のようにその根拠を述べる。

「写字生がミスを犯したということを認めねばならない。というのも、第1652詩行は典型的な「歌い終りの詩行<vers conclusion>」の一つであり [……]、そして、第1663詩行も同様に、典型的な「歌い出しの詩行<vers d'intonation>」の一つである [……]」(Moignet, p. 133)

そして近年、「冒頭詩行」¹⁾は一層形式的、網羅的に扱われるようになってきた。例えば、ドミニック・ブーテはA・I・ジットルマンの分類法を参照しつつ、四つのカテゴリーからなる分類法を考案し、『ジャン・ド・ランソン』の「冒頭詩行」を分類している²⁾。この分類から得られた結果は、武勲詩の技法の存続あるいは非存続の度合いを測定する尺度として用いられるのである。

「この四つのカテゴリーは、ほとんどすべての事例を網羅している。非典型としてこれらのカテゴリーから漏れ落ちるのは、たった八つの詩節だけである。 [……] それゆえ、トゥルベールが、正に上記の形式上の指標 (marques formelles) によって区別される冒頭詩行に格別の注意を払っていたことは明らかである」(Boutet, p. 23)

1.-2. 形式的特徴の架構性と、技法の実体性

さて、上の引用中ブーテは、カテゴリーの網羅性から、カテゴリーの妥当性とトゥルベールの「冒頭詩行」への配慮を結論づけており、一見リシュネルの主張を裏づけているかのように見える。しかし、形式的特徴に基づく「冒頭詩行」の技法としての実体性を前提しない限り、分類結果からそうした結論は引き出し得ない。カテゴリーの網羅性はトゥルベールによるカテゴリーの尊重——即ち技法の実体的存在——に対する必要条件となり得るが、十分条件とはなりえない。この時点では、カテゴリーを現実 to 価値 (valeur) をもつ³⁾ 実体的特徴を捉えたものと見做す根拠が欠けている以上、分類は架構的な特徴に対して施されたに過ぎず、それ故ブーテの結論を引き出す為には、カテゴリーが現実 to 価値を持つ特徴を分類すること、即ちカテゴリーの妥当性という十分条件を要するのである。

一方、分類法が網羅的であることは、決して分類法そのものの妥当性を立証し

えない。例えば、「冒頭詩行」がアソナンスによって網羅的に分類できるからといって、「冒頭詩行」が特別なアソナンス技法によって特徴づけられているということにはならないのと同じことである。

1.-3 本論の目的と方法

以上により、本論は先ずブーテのカテゴリーの妥当性の有無を問わねばならない。そしてまた否定的結論が出た場合には、単なる批判に終わらないためにも、写本の修正や「作者」の意図の推測などの実体的結論を裏づけることが可能な、「冒頭詩行」という実体的な技法を、形式的特徴に基づいて割りだし得るかどうかを問わなければならない。

以上の目的に適う方法として考えられるのは、「第一詩行」（その存在そのものを問い直している以上、「冒頭詩行」という言葉を用いるのは適切でないと思われる）と、それ以外の詩行との網羅的な比較対照である。この方法によって、ブーテのカテゴリーが、「第一詩行」とその他の詩行を区別し得るかどうかを検討することで、彼のカテゴリーの妥当性を問うことができるばかりでなく、あらかじめ、下位カテゴリーを設定しておくことにより、「第一詩行」と他の詩行との、詳細な形式上の差異を検討し、他の形式的特徴に基づいた「冒頭詩行」の可能性を問うことが可能になる。

作業手順を具体的に述べると、「第一詩行」とその他の詩行の間における、ブーテのカテゴリーの発生率の偏差を算出し、その後可能な限りその偏差の拡大を図るということになる⁴⁾。

2. 予備作業

2.-1 作業対象となる「作品<corpus>」と刊本の設定、刊本の修正

「作品」には『ロランの歌』を選択した。その理由としては第一に、この「作品」が最古のものであり、最もよく武勲詩の形式特性を保っていると考えられているからであり、第二に、武勲詩の形式的特徴の衰退を測定する際の基準として用いられることも多いと考えられるからである。

ベースとなる刊本には、幾つかの修正を写本に施しているものの、モワニエの刊本を用いることとする。この刊本は以下の特長を備えているからである。第一に、モワニエは修正を最小限に留めるベディエの校訂法を受け継いでおり、修正箇所の特長も比較的容易である。第二に、この刊本は最も良く普及しているものの一つであり、現在でも容易に入手できる。最後に、詩行の番号が従来多くの研究が利用しているベディエの刊本と同じであるために参照が容易である。

さて、モワニエの写本修正のうち、本論の作業に大きく関わる幾つかの修正を考慮しなければならない。先に挙げた第125 詩節の問題に加え、モワニエはベディエと同様に、写本が詩節の始まりを示すために用いている赤字の大文字の内の八つを無視しているのである。それ故、写本に従うならば、『ロランの歌』の詩節数はモワニエの刊本の 291に対して 298になる。⁵¹

2.-2. 予備作業

2.-2.-1 カテゴリー、下位カテゴリー、タイプの設定

本論の目的に従い、カテゴリーそのものはブーテのそれに倣う。但し、「第一詩行」がその位置のために、他の詩行と比べ幾つかの特殊性を持つことを忘れてはならない。即ち、第一に「第一詩行」は必ず文の冒頭となる。第二に「第一詩行」は必ず科白の冒頭となる。この二つは同じことを意味するように見えるが、実はそうではない。というのも、これは検索対象の叙述部分と科白部分の区別を要請するものだからである。

ブーテのカテゴリーは以下のような、一般的形式化を施し得る。

- I. 文頭の詩行が主語となる登場人物を指示する語に始まるケース
- II. 文頭の詩行で倒置が行われるケース
- III. 文頭の詩行が接続語に始まるケース
- IV. 文頭の詩行が登場人物、あるいはジョングルールの科白の冒頭になるケース
- V. 上記のどれにも当てはまらないようなケース

我々はこのカテゴリーの下位レベルに下位カテゴリーを、更にその下位レベルにタイプを設定した。以下に注釈とともにそれらの全てを示す。ローマ数字、大文字のアルファベ、小文字のアルファベはそれぞれの略号である。

I. 文頭詩行が主語となる登場人物を指示する語に始まるケース⁶⁾

- A. 人物の名前そのもの
- B. 称号
- C. その他 (a. 冠詞un(s) あるいは数詞付きの称号、民族名など; b. 無冠詞の民族名; c. 所有詞、あるいは所有の被制格の限定を受けるもの; d. その他)

II. 文頭詩行で倒置が行われるケース⁷⁾

- D. 《属詞形容詞+動詞être+主語》 (a. 詩行が一つの倒置構文からなっている場合; b. 詩行が二つの倒置構文からなっている場合; 下半句のêtreが省略され、[c. 《属詞+主語》の語順になっている場合; d. 《主語+属詞》の語順になっている場合]; 下半句にêtre以外の動詞が見いだされ、[e. 倒置している場合; f. 倒置していない場合])
- E. 《動詞+主語》 (a. ço dist ; b. ço sent ; c. ço veit ; g. ço respunt ; d. dist (dient) ; h. respunt (respudent) ; e. 人を主語とする上記以外の倒置 ; f. 補語+i ad ; i. 物あるいは代名詞を主語とする倒置)

III. 文頭詩行が接続語に始まるケース⁸⁾

- F. 時、場、様態を示す副詞(句) (① 倒置を伴う [a. 時の副詞; b. 場の副詞; c. 様態の副詞]; ② 倒置を伴わない [d. 時の副詞; e. 場の副詞; f. 様態の副詞])
- G. 接続詞 (a. 倒置を伴う; b. 倒置を伴わない)

IV. 文頭詩行が登場人物、あるいはジョングルールの科白の冒頭になるケース

- H. 登場人物の科白 (a. 呼びかけ; b. 命令法; c. 疑問文; d. その他)

I. ジョングルールの科白⁹⁾

V. 上記のどれにも当てはまらないようなケース

2.-2.-2. 「第一詩行」の分類

上記に述べた分類肢が、「第一詩行」の分類において網羅的になり得るかどうかは大きな意味を持つ。カテゴリーの網羅性は実体的な「冒頭詩行」の存在のための必要条件だからである。しかし、以上の分類肢に従った「第一詩行」の分類については、別の論文に述べているので、本論では上記の分類肢が「第一詩行」に対して網羅的でありえたことと、下位カテゴリーEの、g、h、iタイプを、新たに設定したことだけを指摘しておく¹⁰⁾。

2.-2.-3. 検索母体の設定

さて、2.-2.-1の形式的定義により、「第一詩行」と比較対照されるべきであるのがその他の全ての詩行と言う訳ではなく、「第一詩行」が必ず文の冒頭部となる以上、文の冒頭部となり、かつ詩節の冒頭部とならないような詩行（以下、これを「文頭詩行」と呼ぶ）だということ、更に、科白の部分については、文の冒頭部でなく、科白の冒頭部のみを対象としなくてはならないということが分かる。それ故、検索母体は、叙述部の文頭と科白の冒頭部からのみ構成しなくてはならない。

但し、科白の部分と叙述の部分在同一平面上に並べるのは、避けなければならない。科白は「作品」全体の四割近くを占めており、語り始めは科白部分全体の一分にも満たないのである。つまり、1400行近くもの科白部分が、文頭であるとならないに関わらず、検索母体から排除されることになる。具体的には刊本でギメ及びティレには含まれている部分を登場人物の科白部分と認めた¹¹⁾。

一方、「作品」全体の六割以上を占めている叙述部に関しては、文頭の詩行とその他の詩行を区別する必要がある。ここに本論の一番の困難があるといっても過言ではない。というのも、写本にその手がかりがない以上、刊本の句読法はあ

る程度校訂者の裁量に任されてしまう部分があるからである。複数の刊本を並べてみると、ポワン・ヴィルギユルとヴィルギユル、時には、ポワンとヴィルギユルの間にさえも異同があることが分かる。しかしながら、例えば、「作品」の第1詩行と第2詩行の間に、主語と述語の関係があるのは明白であり、文頭を選別するのは不可欠の作業である。それ故、本論は句読法に関しては全面的にモワニエの刊本に依拠することとする。

具体的には、ヴィルギユルで詩行が終わっている場合のみ後続の詩行を文頭でないと見做すこととし、他の場合は全てポワンと等価と見做すことにする。

以上の作業により、検索母体として1541詩行が手もとに残ることとなる。ただし、叙述部に含まれる「ジョングルールの科白」については、分類後に語り出しの部分のみを取り出さなければならない。これにより検索母体は1533行になる。

3. 分析結果とその検討

3.-1. カテゴリーの検討

「文頭詩行」				「第一詩行」			
I :	2 1 3	[15.5]		[49.1]	1 3 3		: I
II :	2 5 0	[18.2]		[20.6]	5 6		: II
III :	4 0 8	[29.8]		[26.3]	7 1		: III
V :	4 9 9	[36.5]		[4.1]	1 1		: V
	小計	1 3 7 0			2 7 1	小計	
IV :	1 6 3	(10.6)		(9.1)	2 7		: IV
	合計	1 5 3 3			2 9 8	合計	

上の表のローマ数字は各カテゴリーの略号である。全角文字は各カテゴリーの出現回数であり、半角文字は出現率である。I、II、III、Vは、叙述部分に関する特徴であるから、出現回数の合計（表中、小計）は叙述部分の総計にあたり、四カテゴリーの出現率を算出する際の分母となる。IVの出現率は、叙述部総計にIVの出現回数を加えたもの（表中、合計）を分母として算出されている¹²⁾。

V（非典型例）の出現率が「文頭詩行」において異常に高いことが、プーテの
 カテゴリーの妥当性を証明するとは言えない¹³⁾。例えば、IV（科白の語り出し）
 の出現率に、全くといって良いほど偏差のないのが分かる。これは、IVの形式的
 特徴が「第一詩行」を他の詩行から「形式上の指標によって区別される」「冒頭
 詩行」と見做す理由になりえないことを示している。叙述部総計に対するIIの出
 現率の偏差も極めて小さい。更に、IIIの出現率は「文頭詩行」の方が、「第一詩
 行」を上回ってさえいる。

つまり、上のカテゴリーが「文頭詩行」と「第一詩行」の形式的特徴の偏向を
 殆ど示し得ていないということが分かるのである。

3.-2. 下位カテゴリーの検討

3.-1で得た分析結果により証明されるのは、「冒頭詩行」が存在しないという
 ことではなく、プーテのカテゴリーが少なくとも『ロランの歌』においては、妥
 当性を欠くものであったということである。そこで以下では、より妥当性を持つ
 カテゴリーを設定すべく、プーテのカテゴリーの不備の原因を明らかにしなければ
 ならない。そしてそのためには、「文頭詩行」における各カテゴリーの出現率
 を押しあげている下位区分の割り出しが必要となる。それ故、以下に続く表中の
 半角文字は発生率ではなく、各カテゴリーの下位区分の内部比率である。

3.-2.-1 カテゴリーIの下位カテゴリーの検討

「文頭詩行」			「第一詩行」		
C a	2 0	[31.7]	[26.3]	5	C a
b	3 5	[55.7]	[57.9]	1 1	b
c	4	[6.3]	[15.8]	3	c
d	4	[6.3]	[0.0]	0	d
小計	6 3	(29.6)	(14.3)	1 9	小計
A	7 6	(35.7)	(33.1)	4 4	A
B	7 4	(34.4)	(52.6)	7 0	B
合計	2 1 3			1 3 3	合計

I（人物を指示する語に始まるケース）の出現率は「第一詩行」では「文頭詩行」での三倍近くになる。表を一見して分かるのは、「文頭詩行」において下位カテゴリーC（その他）の内部比率が異常に高いことである。但し、Cの下位区分の比率には大きな不均衡は見られない。それ故、両者の出現率の偏差を更に拡大するには、Cの切り捨てが有効であることがわかる。

3.-2.-2. カテゴリーIIの下位カテゴリーの検討。

「文頭詩行」			「第一詩行」		
D a	4	[22.2]	[35.7]	5	D a
b	2	[11.1]	[14.3]	2	b
c	0	[0.0]	[14.3]	2	c
d	4	[22.2]	[28.6]	4	d
e	1	[38.9]	[7.1]	1	e
f	7	[5.6]	[0.0]	0	f
小計	18	(7.02)	(25.0)	14	小計
E a	29	[12.5]	[19.0]	8	E a
b	0	[0.0]	[11.9]	5	b
c	0	[0.0]	[2.4]	1	c
d	66	[28.4]	[35.7]	15	d
e	49	[21.1]	[14.3]	6	e
f	19	[7.0]	[4.8]	2	f
g	2	[0.9]	[0.0]	0	g
h	31	[13.5]	[0.0]	0	h
i	36	[15.4]	[11.9]	5	i
小計	232	(92.8)	(75.0)	42	小計
合計	250			56	合計

まず、下位カテゴリーD（動詞+主語）とE（属詞+être+主語）の内部比率の間に顕著な不均衡が見られる。しかも、下位カテゴリーDの諸タイプ間の内比率にも偏差を認めることができる。即ち、下半句がêtreとは異なった動詞を導入している場合を示す、e, fが「文頭詩行」の8例に対し、「第一詩行」には1例しかない。つまり、e, fの排除がDの偏差拡大に有効であることが分かる。

一方、EbおよびEhの不均衡は形式的特徴を確定するに有効とは言えない。

というのも、a, b, c, gの間の差異、また、d, hの差異は、動詞の意味の差異に依拠しているからである。形式上、前四者は《co+動詞+主語》に、後二者は《[科白+]動詞+主語[+科白]》に還元されてしまう¹⁴⁾。

寧ろ、E f並びにE iの不均衡に目を向けなければならない。というのも、fの殆どと、iの全てのケースが、人物ではなく物を主語としており、その点で、他のタイプと全く性質を異にするからである。また、「文頭詩行」の方でfタイプは本来、倒置の定義に反するとも考え得る。それ故、Eを「冒頭詩行」の形式的特徴として補強するためには、f, iのタイプの排除が有効と思われる。

3.-2.-3 カテゴリーⅢの下位カテゴリーの検討

「文頭詩行」			「第一詩行」		
F a	2 6	[30.9]	[27.8]	1 0	F a
b	4 4	[52.4]	[51.4]	1 8	b
c	1 4	[16.7]	[21.6]	8	c
小計①	8 4	(25.8)	(87.8)	3 6	小計①
F d	5 0	[20.6]	[20.0]	1	F d
e	1 3 4	[55.4]	[60.0]	3	e
f	5 8	[24.0]	[20.0]	1	f
小計②	2 4 2	(74.2)	(12.2)	5	小計②
合計	3 2 6	<79.9>	<57.7>	4 1	合計
G a	1 0	(12.2)	(16.7)	5	G a
G b	7 2	(87.8)	(83.3)	2 5	G b
合計	8 2	<20.1>	<42.3>	3 0	合計
Ⅲ 総計	4 0 8			7 1	Ⅲ 総計

[]内は小計に対する、()内は合計に対する、<>内は総計に対する内部比率をそれぞれ表している。

先ず目につくのは、下位カテゴリーFにおける倒置を伴う場合(小計①)と倒置を伴わない場合(小計②)の内部比率の偏差である。この偏差こそが、F(副

詞)とG(接続詞)の内部比率の偏差をもたらしているばかりか、「文頭詩行」におけるカテゴリーⅢの出現率を押し上げてもいるのである。それ故、d, e, f(倒置を伴わない副詞の諸タイプ)の排除が、「文頭詩行」と「第一詩行」におけるⅢの出現率の逆転に有効であると言える。

3.-2.-4 カテゴリーⅣの下位カテゴリーの検討

「文頭詩行」			「第一詩行」		
H a	6 4	[52.9]	[87.1]	2 0	H a
b	2 5	[20.7]	[4.3]	1	b
c	2	[1.7]	[4.3]	1	c
d	3 0	[24.7]	[4.3]	1	d
小計	1 2 1	(74.2)	(85.1)	2 3	小計
I	4 2	(25.8)	(14.8)	4	I
合計	1 6 3			2 7	合計

Ⅳの叙述部における出現率がほぼ同じであるので、両者の内部比率を表す数字の直接比較はある程度有効である。一見して分かるのは、ジョングルールの科白の比率が高いと言うことである。恐らく、このことがカテゴリーⅣにおける「文頭詩行」と「第一詩行」のささやかな不均衡を引き起こしていると考えられる。いずれにせよ、ジョングルールの科白の始まりは「冒頭詩行」の特徴(敢えて形式的という語を付さないのだが)とはなりえない。次いで目につくのは、「第一詩行」におけるH a(登場人物の科白で、呼びかけに始まるもの)の内部比率が異常に高いということである。それ故、カテゴリーⅣをH aタイプのみ限定するのが、偏差の拡大に有効ではある。但し、「文頭詩行」におけるH aタイプの出現率も五割を上回っている以上、その効果は極めて限定されたものにしかならないといえる。

4. 新たなカテゴリーの設置

4.-1. カテゴリーの修正の方法と手順

3-2 の検討の結果、「文頭詩行」各カテゴリーの出現率を押し上げている下位カテゴリー（あるいはタイプ）が明らかになった。より妥当性を有するカテゴリーを設定するためには以下の措置を取らねばならない。

- ① I - C、 ② II D - (e + f)、 ③ II E - (f + i)、
- ④ III F - (d + e + f)、 ⑤ IV - (I + H - a)

但し、⑤の措置が部分的な改善にしか繋がらないこと、また、下位カテゴリー G に有効な修正措置が発見されていないことに注意しなければならない。これについては後述することにして、もうひとつ注意しなければならないことがある。即ち、④の措置は、下位カテゴリー F の定義を「冒頭部に副詞がおかれ、かつ倒置しているような文頭詩行」というように縮小することを意味しているが、これは D の定義を、「主語が人物を表す語でありかつ、倒置を行っている文頭詩行」というように変更する③の修正の影響を受け得るし、またその③の修正からして、人物を示す語を、固有名か役職名に限る①の修正の影響を受け得るのである。つまり、修正の順序が問題となって来る。というのも、①、③、④の順序で修正を行った場合、①の修正が E と F に対して、③の修正が F に対して有効であったかどうかの確認の機会が失われることになるからである。それ故、修正は影響範囲の狭いもの順、即ち、④、③、①の順に行わなければならない。

以下紙数の関係上、〈「第一詩行」における出現件数（同出現率）：（「文頭詩行」における出現率）同出現件数〉という数値表記を用いることにする。尚、出現率とは、先に述べた通り、出現件数を叙述部総数で商算して得られた数値である。

4.-2. カテゴリーの修正

4.-2.-1. カテゴリーⅢの修正

- ④の措置を G に施すことはできない。その場合、数値は 30(11.0) : (6.0) 82 ⇒

5(1.8) : (0.7)10 となり、ほとんど偏差拡大に効果がないだけでなく、出現件数そのものを著しく減少させてしまうからである。一方、同じ措置をFに施した場合には、42(15.5) : (23.8)326 ⇒ 36(13.3) : (6.1)84という数値の変化により、出現率の著しい逆転が生じる。

4.-2.-2. カテゴリーIIの修正

③の措置により、ものの主語を持つ倒置を排除した場合、42(15.5) : (16.9)232 ⇒ 35(12.9) : (12.9)177という数値変化がEでは起こる。つまり、偏差は縮小するものの、出現率の逆転には至らない。しかし、更にカテゴリーIでは分類できない、代名詞主語の場合などを排除した場合、数値は36(13.3) : (12.0)165となる。更に、同じ措置を修正後のFに施した場合、36(13.3) : (6.1)84 ⇒ 32(11.8) : (3.2)44となるので、③の措置がFに対しても有効であると言える¹⁵⁾。

一方、同じ措置をDに施すことはできない。その場合、数値は14:18 ⇒ 1:7になってしまうからである。③とは逆に、Dからひとが主語となるケースを排除し場合には、数値は13:11 となるものの、②の措置で、下半句にêtre以外の動詞が現れるケースを排除した場合の13(4.8) : (0.7)10 には及ばない。

4.-2.-3. カテゴリーIの修正

下位カテゴリーCの排除は、133(49.1) : (15.5)213 ⇒ 114(42.1) : (10.9)150という数値変化をもたらし、カテゴリーIに対し明らかに有効である。同様の措置を修正後のE、Fにも施してみると¹³⁾、

E 36(13.3) : (12.0)165 ⇒ 32(11.8) : (8.6)118

F 32(11.8) : (3.2)44 ⇒ 22(8.1) : (1.5)21

という数値変化が生じ、①の措置がE、Fに対しても有効であることが分かる。

4.-3. カテゴリーの統合

4.-2.-3の結果は、カテゴリーIの定義を「主語となる人物を示す、固有名あるいは役職名がどこかに現れるような文頭詩行」というように拡大した場合に、E、Fがこれに統合される可能性を示している。但し、この際に問題になってくるのは、一旦排除したF d, F e, F f, D e, D f及び非典型例から、上の定

義に適う詩行を割り出し、統合カテゴリーに組み入れなければならないということである。そうしたケースは「第一詩行」において3例（発生率1.1）、「文頭詩行」において25例（発生率1.8）存在する¹⁶⁾。つまり、統合カテゴリーを成立させようとする場合、僅かではあるが偏差の縮小が起こるということである。しかし一方、統合カテゴリーにGを組み込む場合、30(11.0):(6.0)82⇒24(8.9):(1.9)26という数値変化が起こる。それ故、「第一詩行」における、わずか一詩行分ほどの偏差を救うために、カテゴリーの統合をためらう必要はあるまい。「必要なく多くのものを措定すべきではない」。

4.-4. 統合カテゴリーによる分類

- I. 主語となる固有名、役職名がどこかに現れている文頭詩行
- II. 《属詞+être+主語》の倒置構文のみで構成される文頭詩行
- III. 上記のいずれにもあてはまらない場合

無論、「a. 倒置を伴う場合；b. 文頭の接続語と倒置を伴う場合；c. 文頭の接続語を伴う場合；d. その他の場合」といった下位カテゴリーにIを細分化することは可能である。しかし、そうした下位カテゴリーは「冒頭詩行」の形式的特徴には全く関与しないことを忘れてはならない¹⁷⁾。

「文頭詩行」			「第一詩行」		
I	3 2 9	[97.1]	[93.7]	1 9 2	I
II	1 0	[2.9]	[16.3]	1 3	II
	3 3 9	(24.7)	(75.6)	2 0 5	
III	1 0 3 1	(75.3)	(24.4)	6 6	III
叙述部総計	1 3 7 0		2 7 1	叙述部総計	

5. 結論

5.-1. ブーテとモワニエの主張に関して

3.-1により、4つのカテゴリーのうち3つのカテゴリーまでが、「第一詩行」と「文頭詩行」における出現率に大きな偏差を持たないことが明らかになった以上、少なくとも『ロランの歌』においては、ブーテのカテゴリーが「冒頭詩行」の形式的特徴を捉えたものであるとは言い難い。そして、たといそのカテゴリーが『ジャン・ド・ランソン』には妥当性を持つにしても、「冒頭詩行」という伝統的技法の存在が認められない限り、カテゴリーの網羅性は叙事詩的特徴の存続の証拠とはなりえない。

4.-2.により、形式的カテゴリーを可能な限り制御し出現率の偏差を最大限にした場合でも、実数上では、「第一詩行」の205に対して、「文頭詩行」が339の典型例を有していることが分かる。それ故、モワニエのように、「冒頭詩行」を詩節の分節の根拠とすることはできない¹⁸⁾。

一方、4.-3.、4.-2.により、二種の詩行の間に最大限の偏差をもたらすことが確認された二つのカテゴリーは、既にリシュネルの指摘したものであったことに注目すべきである。一見、彼の叙事詩的倒置に関する予言は的中しなかったように思える。しかし、下位カテゴリーEには叙事詩的倒置以外のものが含まれており、彼が叙事詩的倒置と呼んだのが人物を主語とする倒置であったことを考えるならば、リシュネルの慧眼には目を見張るべきものがあることは理解されよう。

5.-2. ブーテの「冒頭詩行」とリシュネルの「歌い出しの詩行」

「ジャン・リシュネルは詩節の第一番目の詩行が歌い出しの価値を持つことを明らかにし、頻出する三つの形態を提示した」(Boutet, p.22)

ブーテは形式的特徴に基づく武勲詩の研究史を詳らかにしているにも拘らず、「冒頭詩行」の存在証明に関しては上のように述べただけで、「冒頭詩行」の考察を始める。しかし、そもそもvers d'intonationという言葉で、リシュネルとブーテが言い表そうとしたものは、同一の事態であっただろうか。

本論冒頭部に引用したリシュネルの言葉は、実は以下のような文脈に位置付けられる。即ち、武勲詩は物語的実体だけではなく、音楽的実体を有しており、詩節は、単に同一のアソナンスを踏む詩行の集積というより寧ろ、「歌<chant>」の単位である。「それ故、音楽が詩節を描き出し<dessiner>、言葉がその輪郭を強調する<souligner> ののである (Rychner, p. 71)」つまり、リシュネルの主張は、ある詩行が詩節の第一番目の詩行であるならば、その詩行は形式的特徴を帯びる可能性がある、というふうに定式化できる。

他方、プーテの主張は「形式上の指標 (marques formelles) によって区別される<se distinguer> 冒頭詩行」が存在するということである。換言すれば、これは、形式的特徴により詩節の分節が示される<marquer> ということである。つまり、プーテ及びモワニエの主張は、ある詩行が何らかの形式的特徴を帯びているならば、それは詩節の冒頭部になる、と定式化される。

それ故、プーテらの主張とリシュネルの主張は、論理的に言えば、まったく逆方向を向いているのであり、両者は全く同じ言葉で、同じ事実を扱っていたにせよ、事態の捉え方において全く異なっていたと言わねばならない。なぜなら、詩節の分節は、リシュネルによれば音楽的要請に従うのに対し、プーテらによれば形式的特徴に従うことになってしまうからである。つまり、音楽的実体への確信があったからこそ、リシュネルは「歌い出しの詩行」を厳密に裏付けようとしなかったにも拘らず、プーテらは音楽的実体への確信から切り離した自律的な技法としての「冒頭詩行」に、リシュネルの主張を重ねあわせてしまったのである。

5.-3. 「冒頭詩行」の存在性格

出現率に明らかな偏差が存在するという意味で、我々の設定したカテゴリーは有価値な特徴を捉えていると言える。つまり、それは単に架構的特徴を示すものではない。しかし、それは「冒頭詩行」が実体的かつ自律的な技法であると——詩節の冒頭に特別な詩行を配する技法そのものが存在したと——主張する根拠にはなりえない。カテゴリーがそうした価値を担い得る為には、出現件数そのものに極端な偏差がなければならぬのである。

つまり、『ロランの歌』の「冒頭詩行」は決してブーテのというような存在性格は持たないのであり、寧ろ、リシュネルの言うように、何らかの他の技法に（音楽がその役割を担うかどうかは別としても）付随して起こる二次的現象であると考えられる。無論、これは、後代に自律的な「冒頭詩行」の技法が成立することを妨げはしないが。

5.-4 今後の課題

偏差の拡大をはかる際、最も貢献した修正が下位カテゴリーCの排除であったことは論をまたない。Cを統合カテゴリーに組み込んだ場合、数値変化は、192:329 ⇒ 227:477となる。恐らく、「第一詩行」に統合カテゴリーIが頻出するのは、リシュネルの主張したもう一つの詩節の特性、即ち、詩節の分節が物語の分節と一致することから来る必然的帰結である。つまり、物語が分節されるごとに新たにその詩節の主人公を示さなければならないために、「第一詩行」には人物の名前あるいは称号が現れてくるのであろう。但し、第二の人物がその後に現れる可能性がある。そして、詩節冒頭のプロタゴニストに対するアンタゴニストが詩節の内部で現れてくるというパターンが、即ち、詩節冒頭に登場する一人の人物の科白や行動に対して、不特定多数の人物（多くの場合「異教徒」、「フランス勢」などという語で指示される）、その人物との血縁者、主従の関係のある者（所有詞の出現）が反応を示すという物語構成のパターンが、詩節内部でのCの比重を大きくしていると考えられる¹⁹⁾。無論、これは尚検討を要するが、叙述部を対象とするカテゴリーの内、一番文法的とは言い難いカテゴリーをもって、「冒頭詩行」の形式的特徴とせざるをえなかったことは、「冒頭詩行」の物語平面上からの考察を要請しているように思えるのである。

最後に、カテゴリー修正の際に、検索母体から排除された「語り始めでない科白の文頭詩行」を検索母体に組み込むべきであったかも知れない。しかし、「呼びかけ」と「主語となっている人物を指示する語」を同一視しないのであれば、叙述部との一貫した分類は不可能である。そうした同一視を正当化し得る根拠を本論は見いだし得なかったのである。いずれにせよ、科白部分が余りに蔑ろにされているという批判を本論は甘受せざるを得ない。

【註】

* 本文及び註の参照文献については、末尾の書誌を参照されたい。

1. 訳文の都合上、モワニエの引用では「歌い出しの詩行」と訳したものの、ここでは既に、*vers d'intonation* は音楽的実体と切り離して考えられている以上、「冒頭詩行」という訳語の方が適切である（本論結論部を参照）。
だからといって、詩節の音楽的実体が否定されたとは言えない。ペンサムは『ロランの歌』の *sentence stress* が一定であることをコンピューターを駆使して実証し、これを武勲詩の音楽的実体の反映であるとしている。また、モンテヴェルディは、聖者伝の行数一定の *strophe* から武勲詩への *laisse* の移行に平行して、メロディー反復の単位が詩節から詩行へ移行したとしている。
cf. Pensam, pp.15-73; Monteverdi, article
2. ブーテのカテゴリーは以下の通り
I. les vers commençant par un nom ou un titre de protagoniste:66
II. les inversions épiques sans mot de liaison :17
III. les vers introduits par un mot de liaison :32
IV. les apostrophes et discours d'un personnage ou du jongleur:29
V. les vers atypiques : 8
但し、ブーテ自身は上のような一覧表形式をとらず、文章で各カテゴリーの定義と発生数（:の後の数字）を提示している。カテゴリーⅢの〈par un mot de liaison〉は、恐らく〈par des mots de liaisons〉の間違いであろう。厳密に一語の副詞のみをカテゴリーⅢとして分類を行うと（つまり、副詞句を排除してしまうと）、少なくとも『ロランの歌』では非典型が頻出してしまふ。
3. ある事実は、それが他と区別される限りにおいて特徴としての価値を持つ。
4. 前者の作業は、本論3.において、後者は本論4.において行われる。
5. cf. Bédier, pp. 303-318, Note Critiques; Hecht, pp. 25-27
モワニエは写本の *s'altre*, *s'or*, *s'altre* などのエリジョンを残すなど、写本の読みをベディエ以上に尊重する一方で、ベディエの様に全ての訂正箇所を巻末で示すことはしない。モワニエが詩節冒頭の赤字に言及するのは、第125詩節に関してのみである。つまり、両刊本は本論にとって相補的な役割を果たしてくれるものと言える。但し、我々の修正は完全に写本を尊重しているわけではない。というのも、写本は時に、アソナンスの変更にも拘らず、赤字を付して詩節の変更を示さない場合があるからである(1.177, 1.271,)。また、詩節の第一詩行を除いて、全て赤字で詩行を始める詩節も存在している(1. 160)
また、コンピューター検索を行うという要請に従い、詩行冒頭の大文字を小文字に変えた。固有名詞を強調することができるという利点をも併せ持っているのである。また同様の理由で、アクサン記号も全て省略した。

6. これらは全て主語あるいはi adの補語の機能を果たしている場合に限る。称号の後に人物名が続く場合も多いが分類上は区別しなかった。
7. 古仏では主語人称代名詞が省略されることが多いが、これが省略されていない場合にのみ倒置を認めた。但し、co est構文を倒置とは認めなかった(cf. 註16)。また、D dタイプには下半句に動詞êtreが見出される場合も含めてある。
8. 本論はあるいはこの語を拡大解釈し過ぎたかも知れない。(註2参照)
9. 原則として、叙述が一、二人称で行われる場合や、呼びかけが混入している場合をジョングルールの科白とした。但し、幾分恣意的な判断を免れ得ない以上、できる限り上記の他のカテゴリーに分類した。
10. cf. 《Les vers d'intonation de la Chanson de Roland》(dans le TLLMF, n° 4, 1993, 大阪市立大学森本研究室発行)
尚、新しく設置したタイプは断じて以下の考察の公正を損なうものでない。これらは意味的特徴に基づくものであり、形式的にマーク付けられた事例を下位区分するに過ぎない。本論3.-2.-2.及び、その註を参照されたい。
11. 周知の通り、こうした科白を指示する指標は写本には存在しない。しかし、このことは必ずしも、叙述部分と科白部分の区別の形式性を損なうことにはならない。というのも、人称や時称の変化という文法的指標及び、科白に先立つ動詞の価値によって、科白部分の多くが一義的に確定され得るからである。
12. 以下、本論中で単に出現率という語を用いた場合、ここでの定義に従うこととする。
13. 非典型例の第一番目に来る語を文法的に分類してみると以下のようになる。
関係詞：5；属詞形容詞：16；副詞（否定のne：32を含む）38；代名詞：48；前置詞：69；動詞（過去分詞も含む）：132；名詞（冠詞、数詞、所有詞を伴う物も含む）：137；その他：54
上の分類から大まかに判断すると、人物を直接名指す代わりに、代名詞が文頭に来たり、また、動詞が文頭に来て代名詞が省略されてしまったりすることにもまして、非典型例の増大に影響が大きいのは、定型表現の繰り返しである。例えば、上の非典型例の内の百行余りが戦闘描写に関わるものと考えられるが、甚だしく繰り返される例を挙げるなら以下のようになる。
voillet o nun: 5; munjoie escriet: 6; siet el c(h)eval: 7; de lur [sun] espee(s) [espiez, algeir, osberc]: 7; tient [trait] Durendal [Haltclere, l'olifant, sun espriet, etc.]: 9; le [sun] c(h)eval brochet: 9; l'escut: 15 [l'escut li freinst: 12]

これ以外にも、文字通りあるいは、微妙な変化をつけて繰り返される表現は数多くある。また、こうした定型表現は戦闘描写に限られるものではなく、例えば頻出する定型表現として、n'i ad: 10、ne poet muer:3によって導かれる二重否定表現などもある。但し、これは概観を述べただけのものであり、数値算出にも正確を期していないので、尚検討を要することを断っておく。

上に挙げた以外にも、非典型が頻出するもう一つの好ましからざる理由が存在することを指摘しておかなければならない。それは句読法上の問題である。

e sis cumpainz Gerers fiert l'amurafle.
l'escut li freint e l'osberc li desmaillet, (vv. 1269-70)

li quens Rollant ne li est guaires loign;
dist al paien: 《Damedeus mal te duinst!》 (vv. 1897-98)

上の二つの条りはモワニエの刊本を引き写したものである。ところで、第1269詩行のポワンと第1897詩行のポワン=ヴィルギュルは、ブラウルトの刊本では、両方ともヴィルギュルに、セグルの刊本では、前者がヴィルギュルになっているのである。こうした例は、他にも多く存在すると思われる。

14. こうしたカテゴリーを導入したのは、一つには意味的特徴に基づく「冒頭詩行」の可能性を示す為である。因に、タイプhの(《respunt [respundent] +主語》)の著しい不均衡は、呼びかけに対する返答が詩節内部でしか行われないことを意味しており、カテゴリーIVのHa(登場人物の呼びかけ)の発生率における「第一詩行」の若干の優勢、「第一詩行」におけるHaタイプの内部比率のずば抜けた高さ、加えてEdタイプにおける「第一詩行」の優勢に呼応しているのである。
15. カテゴリーIによる各カテゴリーの主語の分類結果は註末尾に付してある。
16. 統合カテゴリーに加えられた事例は、「第一詩行」: F: 2例; D: 1例; 「文頭詩行」: D: 3例; F: 10例; 非典型: 12例(ço est+固有名詞を含む: この場合固有名詞が主語であることについては、Ménard, p.34参照)である。
17. 無論、科白部分を忘れたわけではない。科白の冒頭を形式的指標とすることは不可能である以上、一覧表に科白部分を入れることはできないが、Haタイプ即ち、呼びかけ(その殆どが、人名か称号である)の場合が、科白冒頭部の総数の八割以上を占めていたということは、上の一覧表との奇妙な一致を示している。そこで、旧カテゴリーIVを新カテゴリーIで分類すると、「文頭詩節」では妥当するケースが47に対し、「第一詩行」では20となり、科白冒頭部総数に対する出現率は39.5%に対して87.0%になる。しかも、この数字には、独立して現れるseigneurs, sire、神への呼びかけとは言い難いDeusとい

う語が含まれている。これを除いた場合、実数は31に対する19に、出現率は31.9%に対する、82.6%になる。しかし、この数字は余り当てにならない。というのも、叙述部と科白部分は全く異なった方法で選別されたものであり、同一の形式的指標に従って論じるべきものではないからである。

18. モワニエが典型的な「冒頭詩行」だと主張する第1663詩行は本論では非典型例に分類される。しかし、モワニエが他の形式的あるいは内容的特徴に従っているとも思われない。同様の詩行が、詩節内部で3例見出されるからである。

19. このことは、3.-2.-2 で述べた、《respunt+主語》《dis+主語》の対立からも裏づけられると思われる。

【Appendice】——カテゴリーIによる他のカテゴリーの主語の分類

<p>I { A:44 B:70 C:19</p> <p>II { D { A: 1 B: 0 C: 0</p> <p> E { A:29 B: 3 C: 4</p> <p>V:0</p> <p>[第一詩行]</p>	}	<p>F1 { A:17 B: 5 C:10</p> <p>F2 { A: 1 B: 1 C: 0</p> <p>Ga { A: 4 B: 1 C: 0</p> <p>Gb { A:16 B: 3 C: 2</p>	<p>I { A:76 B:74 C:63</p> <p>II { D { A: 1 B: 3 C: 3</p> <p> E { A:68 B:50 C:47</p> <p>V: a:4; b:1; c:1</p> <p>[文頭詩行]</p>	}	<p>F1 { A: 8 B:13 C:23</p> <p>F2 { A: 6 B: 4 C: 7</p> <p>Ga { A: 6 B: 3 C: 0</p> <p>Gb { A:11 B: 6 C: 4</p>
---	---	---	--	---	---

【参考文献一覧】

Bédier, Joseph	<i>La Chanson de Roland</i> (Piazza, 1921)
	<i>Commentaire de la Chanson de Roland</i> (Piazza, 1968)
Boutet, Dominique	<i>Jehan de Lanson -- Technique et Esthétique de la Chanson de Geste au XIII^e siècle --</i> (Presse de l'Ecole Normale Supérieure, 1988)
Brault, Gerard	<i>The Song of Roland -- An analytical Edition</i> (Pennsylvania State University Presse, London, 1978)
Duggan, Joseph	<i>A Concordance of Chanson de Roland</i> (Ohio State University Presse, 1969)
Hecht, Michael	<i>La Chanson de Turol -- Essai de déchiffrement de la Chanson de Roland --</i> (J. C. Bally, 1988)
Moignet, Gérard	<i>La Chanson de Roland -- Texte Original et Traduction --</i> (Bordas, 1969)
Pensom, Roger	<i>Litterary Technique in the Chanson de Roland</i> (Droz, 1982)
Ménard, Philippe	<i>Syntaxe de l'Ancien Français</i> (Bierre, Bordeaux, 3 ^e édition, 1988)
Monteverdi, Angelo	《La laisse Epique》(dans <i>La Technique littéraire des Chanson de Geste</i> , Belles Lettres, 1959)
Rychner, Jean	<i>La Chanson de Geste -- Essai sur l'Art épique des Jongleurs --</i> (Droz, 1955)